CORE
Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
Provided by Kansai University Repository

関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

2010年度卒業論文紹介

その他のタイトル	Vorstellung einiger Diplomarbeiten 2010
著者	三仲 順子, 野本 聡乃
雑誌名	独逸文学
巻	56
ページ	129-132
発行年	2012-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10112/00018010

関西大学『独逸文学』第56号 2012年3月

2010年度卒業論文紹介

1．三仲　順子

Denglisch：英語かぶれのドイツ語
――雑誌・広告の英語使用頻度調査――

筆者が大学二年時にドイツへ留学した際に、日常生活の中で英語表記の看板や広告を目にすることが頻繁にあった。確かに、列車で容易に国境を越えることが出来る陸続きのヨーロッパでは、国際共通語として大きな役割を果たす英語の表記を使用することは、一見非常に便利なように思われるが、はじめてこのような英語表記を目にした人は、意味を正しく理解しているのだろうかという疑問を抱いた。そして、Denglischと揶揄されるほど大量の英語がドイツ語に侵入する問題がドイツで起こっていることを知り、一体どれほどの英語がドイツ語のなかで使用されているのかということに興味を持ち、卒業論文のテーマに選んだ。この論文では、特に雑誌と広告に焦点をあて、実際にどれほどの英語が使用されているのか調査し、Denglischというドイツ語を脅かす状況が、今後どのように推移していくのか考察する。

そもそもDenglischとは、ドイツ語の“*Deutsch*”と英語の“*Englisch*”を合わせて作られた造語である。ドイツ言語協会はこのドイツ語の中に英語が氾濫している現状をDenglischと呼び、英語を好んで取り入れようとする一部の者たちの考えや行動が問題であり、それがDenglischと言われるような現象を引き起こしているとみなしている。

大国アメリカの影響により国際共通語としての地位が確立するだけでなく、コンピューターの普及によって他言語を使用する人々のコミュニケーションが容易になったことが、英語の影響を広める大きな要因だということが分かる。さらに、グローバル化に伴い英語教育に力を入れる教育制度がそれに拍車をかけているのだ。

しかし、Duden編集部はDenglischについて、便利だから、格好良い

からという安易な考えで外来語を使用することには賛成しないが、ドイツ語では上手く表すことができない場合など、適切な場面での外来語使用は認める。ドイツ語を尊重し外来語と共存する考えを持っていれば、外来語は脅威ではないとしている。

この論文で最も重要な部分はDenglischの使用頻度調査である。この調査を通して、実際にドイツ語の中にどれほどの英語が使用されているか見ていく。広告に外来語を使用することは、消費者の注意を強くひくことを目的としている。さらに、国際共通語として世界で重要な地位を得ている英語を使用することで進歩、国際性、革新というイメージを連想させる。しかし、広告に英語を使用することはメリットばかりではなく、同時にデメリットも生じる。それは英語使用により起こる広告理解の問題である。さらに雑誌の比較調査では、SpiegelとSternの雑誌記事の比較では知識人雑誌であるSpiegelでより多くの英語が使用されていた。そして、SpiegelとUni Spiegelを用いた世代別調査では若者向けのUni Spiegelで多くの英語が使用されていた。

ドイツ言語協会は1997年に設立され、独自の文化・学問言語としてのドイツ語をさらに発展させ、英語の抑圧から守り、ドイツ語の威厳や美しさを伝えることを目的として活動を行っている。そして、毎年9月の第2土曜日を「ドイツ語の日」と定め、ドイツ語を話す人にドイツ語の尊厳について考えさせ、正しいドイツ語を広めるための日としている。このような運動により、2010年春からはドイツ鉄道が駅構内の看板やサービスで使用していた英語をドイツ語に戻すという取り組みが行われることになった。

ドイツにおけるDenglischの現状は若い世代ほど強く、広告に関しては絶大な影響を与えている。さらに、新しい英語の単語は増え続け、Denglischの進展は止まることのない状況であろう。もし、このままドイツ人がDenglischを崇拝するような状況が続けば、ドイツ語は本当の危機を迎えることになるかもしれない。しかし、ドイツ言語協会などの外来語抑制運動によって、ドイツ鉄道のようなドイツ語を見直そうという動きも起こっている。Denglischの問題は今すぐに解決できるというものではない。英語の国際共通語としての役割やコンピューターを技術の発達を考えれば、しばらくの間はこのまま進行し続けるだろう。これ

を食い止めるには、ドゥーデン編集部が言うように、正しいドイツ語と外来語の適正な使用ができるかどうかが重要な鍵になるだろう。

2．野本　聡乃

フンデルトヴァッサーの建築
――自然と創造性の共存を目指して――

オーストリアの画家フンデルトヴァッサーは、画家として活躍する一方で、建築家・エコロジストとしての活動も積極的に行った。本論では、彼のデザインした建築に焦点を当て、建築や自然に対する考え方を明らかにしつつ、画家である彼が建築によって何を実現しようとしたのかについて論じている。

第１章では、フンデルトヴァッサーの生涯、人物像について述べている。1928年ウィーンに生まれたフンデルトヴァッサー（本名 Friedrich Stowasser）は、1949年頃から鮮やかな色彩の独創的な絵を描くようになり、独自のスタイルを確立する。1958年の「建築における合理主義に反対するカビ宣言」をはじめ、建築、環境、芸術に関する演説やパフォーマンスを生涯にわたって行う。1980年以降、オーストリアとドイツを中心に数多くの建築プロジェクトを手がけ、同時に自然保護のキャンペーンにも参加する。彼は、世界各地を自ら改造した船で旅したり、いくつもの名前を名乗るなど、非常に個性的で奔放な人物であった。彼はどんなときにも自由を求め、常識や人の目にとらわれず、自分の信念にしたがって行動した。

第２章では、彼の絵画作品の特徴や影響を受けた人物について、作品を参照しながら説明している。作品は鮮やかな色彩で描かれ、人・自然（樹木）・建築をモチーフにしたものが多い。最大の特徴は、渦巻きである。彼はあるドキュメンタリー映画で、精神分裂病の人々が描く渦巻き模様を見て、渦巻きを生と死の象徴に感じ、多くの作品の中に登場させるようになった。彼が描く渦巻きからは、直線への嫌悪と有機的なものへの憧れが感じられる。彼は、ドイツの画家ヴァルター・カムプマンの描く円形の樹木や、オーストリアの画家エゴン・シーレの描く街や家の

イメージに感銘し、大きく影響を受けた。

第3章では、フンデルトヴァッサーの建築理念や建築家としての活動について述べ、彼がデザインした建築の写真を例示し、建築理念がどのように作品に反映されているか説明している。彼は建築を、人間本来の皮膚（第1の皮膚）、衣服（第2の皮膚）につぐ第3の皮膚だとし、非常に重要なものだと考える。彼は直線の排除、自然との共存、不規則性の許容といったことを重視し、演説やパフォーマンスの中でその重要性を繰り返し説いた。1958年「建築における合理主義に反対するカビ宣言」と、1968年「ロースからの解放—個人の改築許可法または建築ボイコット宣言」の中で、彼は直線と、直線で構成された近代建築を徹底的に批判した。そしてそのような建築を放置すると悲惨なことになるとし、個人が自由に家を改装できるようにすべきだと主張した。また自然を愛する彼は、家を建てることによって失われた自然を取り戻さなければならないと考え、屋上に草木を植え、「木の借家人」を窓に植えた。彼は植物を家に取り入れることで、環境を改善させるだけでなく、幸福と健康を生み出すものとして、住民にとっても重要な役割を果たすと考えていたようである。彼の建築では、窓、外壁、床、壁、柱などすべてにおいて、創造性にあふれた不規則な造りになっている。形や大きさが異なる窓を不規則に配置し、トイレや浴室のタイルも不規則に並べられている。大阪には、キッズプラザ大阪にあるこどもの街（1995－1997）、ゴミ焼却施設である舞洲工場（1996－2001）、下水汚泥集中処理施設である舞洲スラッジセンター（1996－2003）と、彼がデザインした建築が3つある。それぞれ彼の建築の特徴が色濃く見られる。

フンデルトヴァッサーは、無個性で変化がなく、退屈な近代建築が、そこで生活する人間に悪影響を及ぼすと考えた。そのため、彼はそれを治療する建築医となり、草木と自らの創造性を用い、生き生きとした温かみのある建築をデザインした。彼はそのような家に住むことで、規則的で画一的な直線の支配から解放された、人間らしい生き方を提案したかったのである。